

「人とつながる、街を生きる」 ～知り合えない私たちと隣近所の多文化共生～

3月、「地域の国際化セミナー2021」をオンラインで開催しました。今日の地域課題「住民同士のつながりの希薄化」に焦点を当て、講師やパネリストの取り組みにヒントを得ながら、これからの地域づくりを考えました。

●講演「住民の半数以上が外国人！」

「芝園団地」発 共存から共生へ

人口4,800人のうち、2,700人以上が外国人の芝園団地(埼玉県川口市)から自治会事務局長の岡崎広樹氏を迎え、「住民同士のつながりの希薄化」と「隣近所の多文化共生」について、ご講演いただきました。

岡崎氏は、お互いが静かに暮らせる関係を「共存」、お互いが協力する関係を「共生」として話を進めました。共存・共生に向けて、生活ルール等を伝える機会の確保や、住民の出会いの機会となる接点づくり、住民間をつなぐ第三者の必要性を指摘しました。芝園団地ではそれらの取組みとして、ゴミ出し等の生活情報の多言語発信や、学生団体「芝園かけはしプロジェクト」との協働による「多文化交流クラブ」の開催等を通して、住民が知り合い、話のできる機会を意識的につくっています。

さらに岡崎氏は、日本人同士も多様かつ関係が希薄化しているなか、隣近所の多文化共生は外国人と日本人だけでなく、多様な人々がどのような関係を築くのかという視点をもつことが大切であると話しました。



▲イベントの企画段階から、一緒に考えたり話したりして、顔見知りになっていく「多文化交流クラブ」

●パネルトーク

「人が地域とつながるということ」

パネルトークでは、様々な形で住民同士のつながりをつくるパネリストにご経験をご紹介いただき、隣近所の多文化共生を考えるヒントを得ました。

浜松市天竜区にて、都市から地方への日本人の移住を支援する土田哲也氏(天竜デザイン事務所代表)は、移住者が

円滑に生活するために事前に移住先の生活や地域情報を知っておくことが必要だと指摘しました。一方で、迎える側も移住者について知ることが大切であり、移住者の声を聞きながら、必要に応じて地域ルールも変えている等の具体的な事例を紹介しました。



▲移住者が地域の担い手として活躍

大阪市西成区にある「釜ヶ崎」では、高齢化した日雇い労働者が野宿生活を余儀なくされるなど、住民の孤立が顕在化しているといえます。同地域で、多様な人々の出会いとアートを通じた自己表現の場をつくる上田假奈代氏(NPO法人 こえとことばとこころの部屋代表)は、多様な人々が共に生きるために、誰もが安心して自分の思いを表現できること、そして、それぞれが自分のことをしっかりと伝え、話し合うことが大切だと話しました。

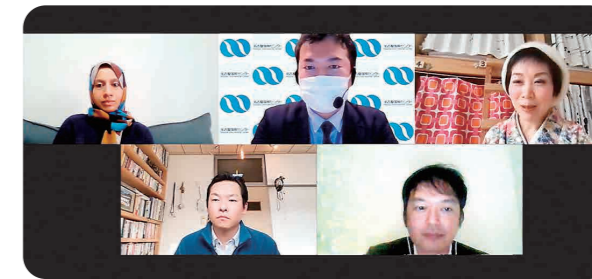


▲「釜ヶ崎芸術大学」の成果として住民が出演する「釜ヶ崎オ！ペラ」

PTAの校外委員を務めるなど、地域とのつながりを築いてきたアハメド ツレイヤ氏(元名古屋市内小学校PTA副会長)は、住民同士の顔が見える関係が安心感につながるとし

て、外国人住民は言語等に不安があっても積極的に地域の行事等に参加すること、日本人住民は生活情報を直接伝えることが大切であると話しました。

最後に講師の岡崎氏は、「隣近所の多文化共生では、住民が共存か共生かを選べるよう、人間関係にも「選択肢」を確保することが大事。そのためにも、隣近所でゆるやかにつながる「きっかけ」となる場をつくるのが大切である」と強調しました。



▲上部左:ツレイヤ氏、上部右:上田氏、下部左:土田氏、下部右:岡崎氏

今回のセミナーでは、住民同士がつながる意味を見つめなおし、隣近所の多様な人々とのような関係を築いていくのかを考えることができたのではないかと思います。

グローバルに活躍する若者たち

国際交流・国際協力・多文化共生などの分野で活躍する若者の活動や思いを発信する機会をつくり、活動をサポートするプロジェクト、「グローバルユースデー」を2月20日(土)にオンラインで開催しました。ゲストによるオープニングトークの後に、愛知県・静岡県の8団体の活動発表を通じ、76名の参加者が交流しました。

「学生時代にゼロから何かをはじめる経験は、社会に出たときの勇気・自信につながる」、「たくさん行動して、たくさん失敗して恥をかいておくことが、自分の糧になる」、「日常的に、自分がやりたいこと・大切にしたいこと・譲れないことを言語化して日々考え続けることが大切」など、若者の背中を押すメッセージを語ってくれたのは、オープニングトークのゲストの中富紗穂さん。

現在、ソーシャルビジネスを通じて社会問題の解決に取り組む(株)ボーダレスジャパンでバングラデシュの雇用創出事業に従事する中富さんは、2017年のグローバルユースデー参加団体のメンバーでした。

当時は振り返っての実践的なアドバイスに、参加者からは「(中富さんの話を聞いて)少し自信がついた」、「ゼロから1を生み出したい」など前向きなコメントが寄せられました。

プレゼン大会では、企業のプロジェクトや海外の外国人留学生との連携、災害時の水の確保に関する研究、オンラインイベントのファシリテーション能力向上研修会の開催など、様々な活動が発表されました。

各団体に分かれて行われたオンラインルームでの交流タイムでは、「はじめまして」同士がお互いのイベント参加の約束を取り交わすなど、具体的なつながりが生まれました。

コロナ禍で人と人との交流が難しい状況下においても積極的に行動を起こしつづける一人ひとりの思いが画面越しから感じられました。

NICでは今後も、グローバルに活躍する若者たちを応援する事業を開催していきます。



▲「グローバルユースデー」の参加者たち。最後の記念撮影にて。

